

出張報告書

4th Core-to-Core International Symposium, "3D Lab-Exchange Program"

出張者：早稲田大学先進理工学研究科生命医科学専攻
修士1年 山崎貴史

出張期間：2018年3月5日～2018年3月10日

滞在先：ボン大学

出張内容(概略)

3月5日：羽田空港 6:10～(ソウル/仁川国際空港経由)～フランクフルト国際空港 14:50 着
列車にてボンに移動の後1泊

3月6日：ボン大学にて研究発表の聴講および他研究者との意見交換を行った。

3月7日：ボン大学にて英語による口頭発表並びにポスターセッションにおける意見交換を行った。また、他研究者の研究発表を聴講し、意見交換を行った。

3月8日：ボン大学にて研究発表の聴講および他研究者との意見交換を行った。

3月9日：フランクフルト国際空港 17:45～(ソウル/仁川国際空港経由・機内1泊)～成田空港 3月10日 17:25 着

総評

今回のシンポジウムでは、世界各国様々な大学から集まった研究者の発表を聞くことが出来た。参加された研究者の方々には、私の先行とする生命科学の分野の方々はもちろんの事、機械工学やバイオマテリアルなど、工学系の研究分野の第一線で活躍している方々もおり、自分のバックグラウンドとする分野以外の話を聞くことが出来た点は見識を広げる良い機会となった。

この話のうち興味を惹かれた研究は数多かったが、一例としていくつか取り上げる。一つ目は早稲田大学柴田教授の体内時計に関する研究がある。この発表は実際にタンパク質、mRNA等を用いた分子生物学的側面からの結果だけでなく、社会科学の分野からの切り口も併せ持っており、非常に説得力があるものであった。二つ目として、実際にロボットを動かす(階段を上る)デモンストレーションを行って発表を行った先生がいた。バックグラウンドが違うため、機械工学の技術は私自身、専門的なところとなると理解が追い付かないが、この発表については実物を用意しており、ロボティクスはここまで来たということを改めて理解することが出来た。また、発表全体を通じて、生体反応をイメージングする技術を扱っている先生も多く、分子生物学の分野への応用が出来そうであると感じた。特に細胞の熱反応も可視化できるということを知り、これについては非常に興味深かった。このほか、バイオマテリアル方面の研究では、光応答性のバイオマテリアルの構築や、ナノシートの先進的な研究について興味をもった。

蛇足であるが、指導教官である合田先生の発表では、アセトアミノフェン肝障害における HIF の役割について発表がされており、自分が携わった実験がこうして形となって世界に発表されたことは非常に達成感を覚えた。

また、3月7日には、1分間の口頭発表とポスター発表の機会をいただいた。英語による口頭発表は初めてであり、自分自身良い発表が出来たとは考えていない。しかしながら、ポスターセッションの際に訪れた研究者に対しては、議論することで発表で伝えきれなかった箇所は伝えることが出来たと考えている。しかし、研究内容が多くの方が行っている機械工学やバイオマテリアルとは離れた分野であったため、ポスターセッションで訪れてくれた研究者の方は少なかったのが現状であった。英語による学術発表はなかなか経験できるものではなく、貴重な機会をいただけたことに感謝している。

今後の課題として、英語による発表を行う際には十分な準備をして臨むこと、分野が異なる方々にも興味を持ってもらえるような発表を心がけることなどが挙げられるだろう。

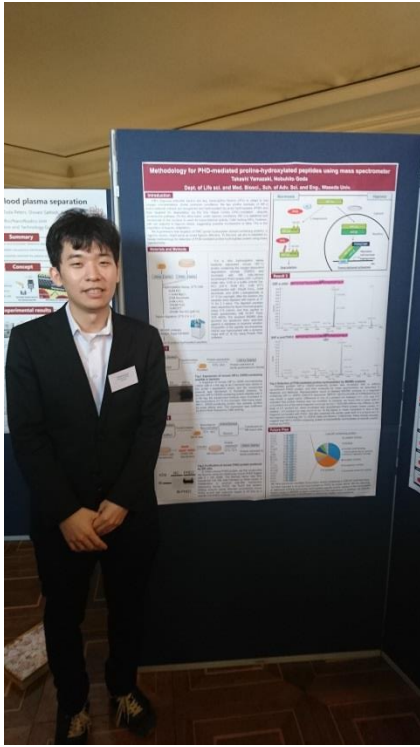
また、シンポジウム時間外についても、3月6日のボン大学における夕食や、7日、8日の夕食等で様々な研究者の方とお話しする機会があり、実り多いものであった。このほか、8日の午後は全体でドイツの戦後文化を知ることのできる博物館に赴きガイドツアーを行うなど、研究以外の分野についても見識を深めることが出来た。

総じて、異なるバックグラウンドを持つ研究者との交流や、自分の発表を通じて、見識を広めることが出来たといえる。このシンポジウムに参加して得られたものは大きく、非常に良い経験ができたと考えている。

以下、滞在中の写真を添付する。



ボン大学にて。今回のシンポジウムに参加された先生方との集合写真



発表ポスターと出張者